

松山大学経済学部2020(令和2)年度推薦入試合格者 課題「書評」

氏名：日和佐 梨加

受験番号：1600131

対象とした本の番号：2

タイトル：あと少し、もう少し

※ かならず万年筆かボールペンで「清書」すること(鉛筆・シャーペンは不可)。なお句読点(、。)や「」が行頭にくるときは、行末の字と一緒に書くかマスの右に書くこと。だれにでも発字はありますが、丁寧に書くことを心がけてください。さらには最後に4枚をホチキスで綴じてください。

「孤独な戦いが向いている。」柳井の言葉だ。
 人間関係や苦境、怪我や病気。人は、それを
 われ違う。だからこそ、他の目線から感じとら
 れることがあり、助け合うことができる。そ
 れを「駆伝」という中で表現したのが、この
 本の魅力だ。「駆伝」といふと、走って襷を
 繋げるものだと、誰もが思う。しかし、それ
 だけではない。走っている時は一人。だが、
 そこには至るまでの過程は、決して一人で作れ
 るものではない。まだ未熟である中学生には、
 仲間や先生、家族の存在は、とても大きなも
 のだろう。この本は、市野中学陸上部を指揮
 していた満田先生の異動が決まり、陸上部を
 受け持つのに一番不適であろう、美術担当の
 上原先生が顧問となる。この出来事をきっかけ
 に、生徒たちが互いに助け合い成長していく
 。上原先生との出会いが、生徒の「駆伝」
 人生にどう関わってくるのかという連想をし
 ながら楽しむことのできる1冊だ。
 物事を新しく始めるには、何らかのきっかけ
 がある。誰かに誘われたり、求められたり、
 魅力的に感じたり。この「駆伝」には柳井の

行動がなければ、誰も「駄伝」には関係していなかつただろク。しかし、柳井の始まりは最悪だつた。「絶望的で悲惨。おれの中学校最後の駄伝は、最悪のスタートを切つた。」柳井が初めて抱いた感情だ。状況が急激に変わり、動搖や不安が募つたはずだ。その要因として、顧問が上原先生に変わつたことはとても大きかつただろク。負の出来事であるようだが、それだけではない。生徒たちの意欲を掲き立てる、良いアクセントになつたのではないかと思う。人はそれぞれ違つた意見を持ち、相手に救つてもらつたり、無意識のうちに助けていたりする。上原先生は、正しい模範的な教師ではなかつたが、生徒たちの気持ちに気づき、良い関係を築き上げていた。ただボーッとしているのではない。上原先生なりに生徒たちと向き合い、深く見つめていた。中学生ならではの揺れる感情に、歯止めをきかす大切な人物だ。

私は何分新しいことに挑戦する時に、この本を読んでほしい。この物語は、駄伝の各区間の走者の目線から描かれる。本人の考え方から見たズレが生じ、中学生ならではのもどかしさを感じる。私が特に紹介したい人物は、2区を走つた誰もが恐れる不良生徒の大田だ。廊坊にをやつてもできぬい凶それが

表に出でしまうことを、俺はずっと避けさせていた。失敗したら恥ずかしい。そんな気持ちや、自分には達成できないうだろ？と始めから諦める。これでは何も始まらない。ただただ後退していくだけなのに。~~ただ~~ 分かっていろけれど、行動に移せない。でも本当は走りたい。そんな思いが大田にはあったのではなかと思ふ。大田は小学校駅伝のメンバーにも選ばれることは実力者だ。しかし、大会まで1ヶ月を切った時に、右足首を捻挫してしまった。怪我といふのは症状だけなく、本人の気持ちも傷つける恐ろしいものだ。大田はここで逃げ出した。気持ちに負けたのだ。そのことを思い出すと、駅伝に参加したくない気持ちも理解しやすい。だが柳井の根強い勧誘にハ"を決めた。気持ちを決めた大田は強い。誰にも負けたくない思いがより大田を強くした。そこには設楽といふ存在があった。大田が唯一勝てないと思つてゐる存在が設楽である。しかし、設楽は大田を恐れています。このもどかしさが、この本を手に取つて感じる面白さだ。

当たり前とは何か。そんなものは存在しないと思う。でも、人はそれが自身の目の前で突きつけられると、一気に不安になり、自分を周りと比べる。4区を走った渡部は、両親と早くから離れ祖母と暮らしている。自分だ

け違う。隠さないと。という気持ちに駆られ、渡部は自分の気持ちに素直になれずじいだ。渡部には上原先生と後半にあたる俊介の存在が大きかった。みんなと少し違った上原先生や、自分に正直な俊介の言葉は大きく響いたにろう。渡部は自分のことも、周りのこともよく分かっている。よく見ている。自ら殻に閉じ込もっているだけで、多くの可能性を持っている。自分が感じている分、相手のことも分かるだろう。私は、自分の感情を大切にしたいほしいと思う。

人それぞれ感じるものが違えば、考え方も違う。この本を読めば、色々な視点から自分がだけでなく、相手のことを考えることができる。自分にできないこと、足りないものが欲しい。誰もが思うことだが、人はそれぞれ違う。だからこそ、色々な人と関わる、足りないものを互いに補い合えば、いいのではないか。1人で生きていく人間なんていないし、誰だって寂しい時、悩む時、辛い時がある。そんな時に支え合える仲間を持ち、自分の個性や仲間を大切にし、自分にしかない時間を織りてほしい。